

我が師 十亀先生に感謝

成田 強

一九六九年卒業 第九回生

私が学芸大学（現教育大学）札幌分校に入学したのは、一九六五年のことです。この年は日韓基本条約の締結をめぐって国会が紛糾し、日韓両国で激しい反対運動が展開されました。田舎の漁師町で育った私にとって全く初めてのデモの隊列に加わったときの高揚感にはよく覚えています。結果的に日韓基本条約は強行採決されてしまいました……。

三年生になり、私は十亀先生の政治学研究室に入りました。この頃は、ベトナム戦争反対運動や立川基地反対闘争、（成田空港建設反対）三里塚闘争、学費値上げ反対闘争等々、全国あちこちで政治闘争、学園闘争が起きていて、まさに激動の時代でした。政治学研究室もまるで梁山泊のような様相を呈しておりましたが、そんな中でも真面目な学習の場でもありました。

先生の敬愛する丸山真男さんや藤田省三さんなどの政治学者の著書の学習はもちろんのこと魯迅や竹内好、むのたけじ等、実に幅広い分野の人たちの書物に出会わせていただき大きな刺激を受けましたし、その後の私の生き方にも影響を与えることになりました。中でも戦争に協力した新聞のあり方に幻滅し、朝日新聞の記者を辞めて郷里の秋田県横手市に帰り週刊新聞「たいまつ」を発行し続けた、むのたけじさんを知ることができたのは大きかったです。

先生は、私たちの議論をあたたく包み込むような笑顔で聞きな

がら的確なアドバイスをしてくださいましたが、学校現場に入った私にとって、「現場にしっかりと腰を据えて、現場を大事にすること、従って現場から自由や権利を奪おうとする者には毅然として対応すること」といった自分の立ち位置を決める際の指標は、曲がりなりにも自分の意志を貫くことができたものになったのではないかと考えています。

いわゆる「中央」に媚びへつらうことなく地域・田舎にどっしりと構えて、地域・田舎からの視点で物事を見つめ考える「田舎の政治学」の実践になったと思います。

また、当時全国で噴出していた公害問題から、加害者と被害者が対立しているときに第三者はないということを学んだこともその後随分役に立ちました。権力を持っている者と支配されている者、強者と弱者が対立しているときに公平・中立を装う者は結局は権力者・強者の側に立っているものだということを何度も思い知らされることになったからです。この構造は今もあちこちで見ることができると思います。

このように、もの見方・考え方の土台を教えてくださいました先生には本当に感謝の言葉しかありません。

卒業してからも先生のお宅には何度かお邪魔させていただきました。奥様の手料理をいただき、お酒を酌み交わしながら、集まった

何人かであるで学生時代のように政治状況等いろいろ語り合ったことが思い浮かんできます。

デモクラットの姿勢貫く恩師の言、古希過ぎてなお澁刺とせり
(二〇〇一年 道新「日曜文芸」に掲載)

先生と最後にお会いしたのは三年前、同期生の村上昇さんとお見舞いに伺ったときです。奥様から病状をお聞きしておりましたので、果たして分かってくれるか心配でしたが、「おお、成田君か」と迎えてくださったあのあたたかい笑顔は忘れることができません。

認知症進めど我の名を言いて迎えてくれし恩師は傘寿

(二〇一〇年 道新「日曜文芸」に掲載)

先生は、今頃は先に逝かれた息子さんとゆっくりと語り合っておられるのでしょうか。私たちもそのうち先生の所に必ず行きますが、まだしばらくは行くことはできません。実は、こちらは今大変な政治状況になっているのです。

自分の思い通りにならなくなって政権を途中でほっぽり出し病院に逃げ込んだ安倍晋三が、戦争をする国・日本を取り戻そうと再び総理の座についてしまいました。そして、マスメディアが権力を批判することを放棄し、それどころか権力のお先棒を担ぐような報道に終始している状況をいいことに、憲法を尊重し擁護する立場にあるにもかかわらず戦争をする国にするために邪魔になる憲法九条をなきものにしてしようと躍起になっています。

「憲法が出来てから六八年も経ち時代にそぐわなくなつた」「現実

とのギャップが著しくなつたこんな現実には合わない憲法は変えなければならぬ」という例の言い草によつてです。つまり憲法を変えて現実に合わせなければならぬというわけです。

しかし、「現実」は自然にできるわけではありません。ある行為を行つてきた結果として現実が出現するのです。憲法を押しつけられたと考える人たちが、憲法の理念や理想をこの国に実現させようとせず、それどころか長きにわたつてどんどん骨抜きにしてきた結果として現実があることを忘れてはなりません。自民党政権によつてつくりだされてきた現実をもとに、現実には既にこうなつているのだからと実質改憲になる「集団的自衛権行使」の容認を迫つてきています。中国や北朝鮮の脅威を煽り、メディアがそれを増幅させていることを利用して着々と戦争をする国の実現のために歩みを進めているのです。

麻生副総理の言うように「ナチスの手口を学んで」、国民の知らないうちに、国会での多数をテコとして次々と法律を制定し、国民が気づいたときにはどうにもならない状況をつくりだそうとしています。

十亀先生！このような状況ですので、まだまだそちらには行かれませんが。私たち一人ひとり微力ではありますが無力ではありません。戦争をする国にさせないために、先生から学んだことを生かして今まで以上に活動を広げていきたいと思ひます。どうか時々私たちに活を入れながら見守つていてください。

先生、本当にありがとうございます。